



地下室の人魚姫



はじまり

大月 香奈

人間様の海の底の世界

むかし昔といってもそれほど昔ではない時間に、一つの世界が存在しました。一つの世界は人間様と呼ばれる人類が住む世界の海の地下にありました。

なんとも形容しがたい世界なのですが、ここでは人魚の世界と語らせていただきます。

人間様はもちろん、自分たちの世界の海の地下に人魚が住んでいるなんて知りません。だって、そんなことを知ってしまったら、警戒心の強い人間様たちは人魚たちを殺してしまうでしょう。ですが逆に、人魚たちは自分たちの世界以外に世界が存在することをしていました。そしてその世界に自分たちは行くことができるのを知っていました。ですが、人魚たちが積極的に人間様の世界に行くことはありませんでした。なぜならば、人間様たちに自分が人魚だということがわかってしまったら殺されてしまうからです。

人間様はなぜ人魚を殺してしまうのか。人魚には人間様にはない不思議な力をもっていました。小さいけれど、それは人間様には絶対持てない力でした。その力によって、人間様は自分たちの世界が侵されることを拒みました。そして人魚にはない科学の力で武装することで、自らを守ってきました。

科学の力は人魚の自然の力を簡単に超えてしまいました。ですから、人魚は自分の持っている力を出したらおびえた人間様に殺されてしまったのです。

科学の力に驚いた人魚たちは自分たちの世界にこもることにしました。いつしか、人間様は人魚のことなど忘れてしまいました。人間様は世界で自分たちがいちばん強いのだとおもったのです。

人魚は自分たちを弱いものだと自覚して、必死に人間様と接触しないようにしながらも、人間様が進化していく姿を監視していました。

さて、そんな不思議な関係で成り立っている二つの世界のうちの人魚の世界に、一人の姫が存在しました。きれいというよりもかわいいと称されるその姫は「桃の姫」と呼ばれ、両親に大切に大切に育てられました。「桃の姫」には「桐の王子」というお兄さんがいました。「桐の王子」は端正な顔立ちとは裏腹に少年のようにとてもやんちゃで、勝手に家を出て帰ってくるという行動ばかりとっておいて、両親を心配させました。

両親の心配とは逆に、「桃の姫」は「桐の王子」の自由な生き方にあこがれを抱くようになりました。と、いうのも「桐の王子」のおかげで「桃の姫」は外に出ることすらゆるされなかったからです。「桐の王子」の育ちをみて心配した両親は「桃の姫」に外の景色をみることを禁止しました。

「桃の姫」は気がつくときすっかり外の世界を知らない姫に成長しました。そんなある日、「桐の王子」は家をでたままかえてこなくなりました。

そんな世界の、あるときのお話です。

王子の家出

窓の外の空を見る。今は夜で外のお星様はとてもきれいだった。私は星が大好きだった。城の屋上にある天窓から見える星空は私の宝物。ずっと、ずーっとこの景色をみて育て、やがては死んでいくのかな、と思っていた。ずっと平和な私の世界。ずっと平和な私たち家族。そう思っていたら、お兄ちゃんが出て行ってしまった。お兄ちゃんのかえってこなくなってしまった。お父さんもお母さんも半狂乱になって探していた。いまはすっかり諦めちゃっているけどね。

ごめんね、お父さん、お母さん。実は私ね、お兄ちゃんが出て行くのを知っていたの。私が一人で遊んでいると、お兄ちゃんは家出をしたときのことを教えてくれた。

お兄ちゃんは実は外だけじゃなくて、別の世界に行っていたの。そのときのお話とそのときのお土産を私にくれていたの。「お父さんとお母さんには絶対に内緒だよ」とお兄ちゃんが言うから、私は押し入れにお兄ちゃんがくれた大きな箱を隠していた。人間様の世界のものらしいこの箱、すごい。最初は使い方がわからなかったんだけど、お兄ちゃんが教えてくれて、私は使い方をおぼえた。この箱を一定の速度で指でたたくことで頭の中の文字を箱の面に映し出してくれるの。

それまで私は、頭の中にずっと言葉をもっていた。私の頭の中は星空みたい。でも普通の星空じゃないの。高速で星が空を流れていくの。私はその星をつかむことができなくて、今までずっとだまっていた。けどね、この箱のおかげで星をつかむことができたの。それでも私はとても不器用だからまだ全ての星をつかめないけど。少しずつ星をつかむことで楽になれた。つかんだ星をきれいに並べて箱の中に入れていたの。

そんな私をみて、お兄ちゃんは今度は線をもってきてくれた。線を箱に繋ぐと、外の世界、人間様の世界につながるみたいなの。知らない人たちといっぱい言葉を交わすことができる。星を交換することができる。私が並べた星をみてもらうことができる。線のおかげで、私は人間様の世界を知ることができた。夢中になっているとお兄ちゃんは今度は人間様の絵をもってきてくれた。人間様は柄のない肌をしているんだって。これは「肌色」というのだった。私は「肌色」はずっと私の両腕の鱗のことだとおもっていたのに。お兄ちゃんは言った。「いつか僕は肌色を手に入れるんだ」って。「だから、人間様の世界に行くよ。ごめんね、桃の姫」って言って、お兄ちゃんは家出する前に言ってくれた。お兄ちゃんは人間様の世界に行ってしまったの。

姫の家出

お兄ちゃんが家出してから、私は「このままでいいのかな？」とおもっていた。毎日、「女王」になるための習い事。年を重ねたら、女王になる。そして王様と結婚して、姫か王子を産んで育てる。みんなそうだし、それが当たり前の世界だから。でも、箱からみえる人間様の世界はちがうみたい。肌色同士で会話して、たくさんの星を交換して。楽しそうなの。お兄ちゃんは肌色の人が好きだと言っていたのだけど、私はそれよりもならべた星の交換が好きだった。私の言葉が他の人に通じることがうれしいの。

私、いつかは死んでしまうから、その前にたくさんの星を交換したい。そしてたくさんの星をみたい。だから、いつかはお兄ちゃんのように人間様の世界に行くんだと決めていた。そしたら、箱が教えてくれた。

「今日は空に電車が走ります。その電車は乗る人を「トウキョウ」にはこんでくれます」

トウキョウっていうのは、人間様の世界の一部なんだって。箱は私に必要なものをおしえてくれた。両腕を隠すための羽衣と、人間様の世界の言葉が書いてある分厚い本。そして眼鏡。人間様の世界は光がまぶしいんだって。コツコツためたお小遣いをつかって、箱が必要だと言ってくれたものを買った。残ったお金は袋にいれた。

「お父様、お母様、私はお兄様と同じになります」

両親が寝ている部屋に向かって礼をして私は家を飛び出した。箱が教えてくれた駅に行った。たくさんの人魚と長い電車。月明かりを浴びて、その電車は走り出したの。トウキョウに向かって。私は悲しくはなかった。この行為が悪いとも思っていなかった。ただ、ずっとドキドキしてねむれなかった。人間様の世界は本当にまぶしいのだろうか？